----------(前回からの続き)----------

アキコ「そういえば、逆ポーランドって、括弧がいらないんだよね。確か」

そうそう括弧よ、括弧。括弧が要らないのが逆ポーランドよ。無事に記憶を紐解いたアキコはちょっと満足気だった。

タイチ「よくそう言われるよね。なぜ、括弧がいらないかをきちんと説明してくれる書物は少ないけどね。難しい話は飛ばすと、結局、優先順位を全部人間が決めてるんだから必要ないって解釈だよね」

タイチは続けた。

タイチ「例えば、こんな感じだね、（１＋２）×３を逆ポーランドでは？」
アキコ「１、２、＋、３、×、かな？日本語にすると、１に２を足して３を掛けるって感じね」

理解が早いのはさすがだけど、少しわかり始めるとすぐにリードしたがる傾向があるよなぁ。タイチは、早く次の問題を出しなさいオーラが出ているアキコをなだめるように、一つ一つ確認しながら話を進めた。

タイチ「そうだね、括弧がいらないよね。じゃあ、３×（１＋２）を逆ポーランドでは？」
アキコ「３、１、２、＋、×、？？？。えっと、日本語だと、３に１と２を足したものを掛けるってなるんじゃない？」
タイチ「そうだね。また括弧は要らないよね」

タイチくんが同じようなことを繰り返し言う時は、何か含みがあるときなんだけど、何かバカにしたような感じなのよね。アキコは訝しげだった。

タイチ「…これは括弧の中の式を先に計算するというルールを知っているからだよね。これを逆ポーランドにすると、アキのようになる」

大体、タイチくんって、人前では水口さんって呼ぶのに、気分がノッてきた時とか飲みに行ったり、二人になるとアキっていうことが多い。確か、一番最初に会社での歓迎会で、アキって呼んでくださいって言ったのがまずかったかしら。まぁ、悪い奴じゃないし、呼ばれても迷惑じゃないんだけど…。

タイチは今までのアキコの回答をメモに書き始めた。略さずに全部書いているタイチの様子を横の席で見ながら、この人は本当にマメだとアキコは思った。

普通の式　　逆ポーランド式
（１＋２）×３　⇒　１、２、＋、３、＊
３×（１＋２）　⇒　３、１、２、＋、＊

電卓では…
　１＋２　×３　⇒　１、２、３、＊、＋

タイチが『電卓では…』と書いたところを、目ざとく見つけたアキコはまた割り込んで言った。

アキコ「ふーん。普通に市販されている電卓で、式の並びどおりにキーを叩いて計算が合うのは（１＋２）×３の９だけね。１＋２×３は７なのに９で間違いだし…」

さすが、頭の回転が速いと思ったタイチだが、理解の早さだけじゃダメなんだとばかりに軽く受け流した。

タイチ「ま、普通の電卓でも、式を変形して２×３＋１ってすれば問題ないけどね」

それじゃぁ、何が言いたいのよ。キッと睨んだアキコの視線にちょっとたじろぎながら、タイチは続ける。

タイチ「えっと、要は式の数字の並びはそのままに優先順位を考えて、×とか＋とかの演算子を後に付けて表現するのが、逆ポーランド式ってことかな」
アキコ「でも、数字と数字の切れ目は実際はどうなの？今は口で区切って１、２と発音しているけど、数字だけで考えると１２なのか１と２なのかわからないし…。普通の電卓だったら数字の間には必ず×とか＋とかの演算子があるからわかるけどさ…」

アキコはさらさらっとメモに書き込んだ。決してしっかりした裏表紙のあるメモではないのに細い指を使った微妙な力加減で、きれいにペンの軌跡を残していった。きっと電車の中でもメモが書けるタイプだ。なんだかんだいっても、やっぱりデキル女性なんだなと妙に納得したタイチだった。

１＋１２＋３　　１１２＋３
--　---　--　　------　--
　　?

タイチ「確かに、今までは、１、１２、＋、３、＋、って感じで意識的に区切って話していたし、メモにも「、」で区切っていたからよかったけど、実際の電卓となるとまさか全ての数字の後に「、」を書くのも面倒だよね」

アキコ「そうね…。でも、そもそも、逆ポーランドの電卓ってあるの？これ
でも私は電卓にはこだわってて、気に入った電卓を探して、いろい
ろなところを見て回ったけど、そんな電卓なんて見たことないけど…」

待ってましたとばかりに、カバンからなにやら取り出すタイチ。アキコには、その取り出す仕草で、何やら自慢したがっているのがわかった。結局は、男の人って宝物を見せたがる子供のようなのよね。はにかむようなウキウキするようなタイチの表情に、急に小さな笑いがこみ上げてくるのをアキコはこらえた。

タイチ「これを見てごらんよ。逆ポーランドの電卓だよ」
アキコ「えぇっ！これ？！作ったの？！」

どうせつまらないものだと思っていたアキコは本当に驚いた。びっくり！？これって、立派なサプライズよね。タイチくんって、たまに手品のようにまさかってタイミングで人を驚かすことが多い。社内のミーティングでもどうしてそんなことまでわかってるのよって感じで。日頃から鋭いことはわかるんだけど、それを隠すタイプね。すぐにとぼけるから何か掴み所がないんだけど…。でも、興味はひかれるのよね。

タイチ「まさか。昔、御茶ノ水で買ったんだけど、ある外国メーカーが作ったハードウェアの電卓だよ。今じゃ、結構な貴重品。僕が作ったって言っていたのは、パソコン上で動くソフトウェアの逆ポーランド電卓さ」
アキコ「へー。面白そうね、それ。ちょっと見せて…」

アキコが電卓に手を伸ばそうとしたとき、彼女の興味がそれてしまいそうだと察知したタイチは、手渡さずに強引にそのハードウェア電卓の話を進めた。

タイチ「このハードの電卓を見てみるとわかるけど、ENTERってあるよね。
１＋２の場合は逆ポーランドに直すと…」
アキコ「１、２、＋でしょ」
タイチ「でも、１なのか２なのかは電卓にはわからないよね。そもそも電卓
には数字がどれだけ続くのかもわからないし」
アキコ「なるほどね」
タイチ「そこで、１の後にENTERキーを押してから、２のキーを押して、＋
のキーを押すと答えが出てくる。ほら」

確かに、タイチの手のひらにあるちょっと年季の入った逆ポーランド電卓の液晶には『３』が表示されていた。始めて見る変り種の電卓に興味津々のアキコだが、同時にやっぱり電卓は電卓と思い始めていた。

アキコ「ふーん。でも、面倒よね…」

ったく、わかっちゃいない…。人がわざわざ電卓まで出して説明してるのに。もうちょっと空気読め。大体、使いこなせるかどうかわからないのに…。わかる人しかわからないんだよ、この電卓の良さは。ちょっと憮然としたタイチだった。

タイチ「まぁ、初めはね。慣れると普通の電卓だと使いづらくてね。はは」

そんな、タイチの雰囲気を感じ取ったのか、アキコは更にイジワルそうな表情で、次の質問を発してきた。

アキコ「じゃ、どうして逆ポーランドの電卓が世の中にないわけ？」

その質問を待ってましたとばかりにタイチは答えた。

タイチ「昔はあったんだよ。アメリカに電卓の二大メーカがあって、TIとHPなんだけど、TIが普通の電卓、HPが逆ポーランド電卓を売っていたんだ」
アキコ「すると、逆ポーランド電卓が普通の電卓にマーケット的に負けちゃったということ？」

マ、マーケット的…。負けちゃった…。冷たい言い方だよな。勝ったとか負けたとかじゃなくって、電卓開発へのロマンを感じないのかアキは…。

タイチ「…まぁ、そういうこと。今では、HPが細々と作っているだけ。自分の電卓はまだHPが頑張って作っていた頃のプログラマー向けの一種類さ。この機種はもう売ってないよ」

歴史はわかったわよ。でも、本当に聞きたいのはそれじゃない。ウンチクにはあまり興味がないアキコは、ちょっとイライラしながら、続けて質問した。

アキコ「…で？どうして、ソフトウェアの逆ポーランド電卓を作ったわけ。もしかして、郷愁？」

ったく、簡単に片付けるなよな、とタイチは思ったが、その反面、そう思うのも仕方ないという表情になった。しかし、今度は妙に落ち着いた態度で、スーッと息を吸って、余裕たっぷりな雰囲気でアキコに質問で答えた。

タイチ「じゃあ、コンピュータとかパソコンの電卓プログラムってどういう位置付けかわかる？」
アキコ「え！？Windowsとかにある『電卓』ってやつ？」

いきなり変化球を投げられて戸惑ったアキコは、ちょっと顔を赤らめて、どうしようもない普通の返事をした。

タイチ「ふーん。で、使ってる？」

何よ、続けて質問して！大体、何を聞きたいのよ？そういったタイチくんの言い方は絶対に裏がある言い方なんだよね。きっと、『使っています』というとガッカリするくせに。

アキコ「いちいち、マウスで電卓の数字をクリックしていられないから、本物の電卓を使うわ。複雑な計算ならExcelを使うし」
タイチ「わかる。…だよね」
アキコ「？」
タイチ「……」
アキコ「？？」

突然、沈黙したタイチに、てっきり、喜んで話を進めるかと思っていたアキコは拍子抜けした。そして、お気に入りらしい腕時計をじっと見つめていたタイチはやっと顔を上げた。そして、嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

タイチ「はい、ここまで。搭乗手続き、始まったよ」
アキコ「何よ。もったいぶって。何が言いたいのよ！」

---------- (つづく) ----------

Copyright(C) 2005 rpn hacks! All rights reserved